

サラワク東部の焼畑民イバンによる植物や鳥の利用および認識の植生間比較

百瀬邦泰、○相原由美（愛媛大学農学部）、加賀道、小泉都（京都大学アジア・アフリカ地域研）

マレーシア・サラワク州東部のイバン族の村の周囲で、原始的な植生と、さまざまなやり方で人為的に改変された植生（以下、二次林とよぶ）にプロットを設営し、植生調査を行った。また、各プロットにみられた植物の名称と利用法の聞き取りを行った。

原始的な植生「カンボン」は、典型的な低地丘陵混交フタバガキ林であり、ランビル国立公園の中にプロットが設営された。二次林としては、以下の5種類の植生を村人が認識しているのでそれによってプロットを設営した。すなわち、（1）用材確保のためや墓場林その他の精神的な場として、小面積が孤立して残されている残存林「プラウ」、（2）焼畑直後の休閑草地「ジェラミ」、（3）焼畑後約5年目で次の伐開が可能な休閑林「トゥムダ」、（4）かつて焼畑を行ったが比較的長期間放置されている土地「パゲラン」、（5）ゴムが植えられたがあまり手入れがされていない「クブン」の5種類である。さらに鳥に関しては、ロングハウス周辺における鳥類相を追加する。

植生間で植物や名称と利用法を比較したところ、興味深いパターンが見出された。

原生林の植物は、科または属のレベルに対応する名称がつけられている。ごく認識しやすい特徴的な種についてのみ、形容詞が付加されて種レベルで認識される。なお、狩猟採集民のプナンに比べ、用いられる語句は、人体、身近な動物、栽培植物などが多く、形態や生息地を直接表現する形容語句が少ないという特色が見られた。利用については、約5年に一度程度の一斉開花時には、果実や動物を探すために頻繁に訪れるが、普段はあまり利用しない。但し数十年に一度のロングハウスの建築では、資材の多くを原生林に依存する。アントウ（お化け）が多く住み、その多くは非常に怖い、中には特別な呪力を授けてくれるものがある。

二次林の植物では、種レベルで一次名称（ジェネリック）がつけられており、形容詞を付加して下位分類する必要はない。日常的に利用しており、作業小屋の建築やロングハウスの日常的修繕に用いる木材、道具の素材、薪、野菜、薬品等が採集されるし、狩猟も一斉開花時以外は二次林で行われる。アントウが多く住み、その中には墓場林に埋葬された死者が含まれる。村で毎年営まれる祭礼において、もてなしの対象となるのは、こうした二次林に住むアントウ達である。二次林は日常的に利用し、身近なものであるのに対し、原生林は怖くて近づきたくないが、時として大きな恵みをもたらしてくれる。また、原生林の植物に注目すると、狩猟採集民のプナンが、システムティックで直喩的な形容法で多くの植物を命名しているのに比べ、イバンは、身近なもので象徴することによって植物を命名している。

鳥についても類似した結果がでていいる。鳥名には、鳥の鳴き声そのものや、その鳥が食べるとされる植物や昆虫、生息地、模様を表す語句が用いられていた。ロングハウスのすぐ周辺の鳥は、村人によると味がよくない、また声や見た目も地味なものが多いためか、村人にはあまり利用されていない。しかし、種レベルの一次名称が多く付けられていた。また、原生林の鳥類は現地名が付けられていない種や、高次の大雑把な分類名で呼ばれる種が二次林よりも多いことから、日常的に観察する機会が多いことが、名前の付け方に関係があると考えられる。